

# A Reception of Wu Changshuo (呉昌碩)'s Paintings and Calligraphic Works in Nagasaki (長崎)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/142">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/142</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 呉昌碩書画の長崎における受容について

松村茂樹

### はじめに

清末民初の上海で活躍し、詩書画印四絶をもって、「中国最後の文人」と称せられる呉昌碩（一八四四―一九二七）の書画は、日本人にも好まれ、多くの作品が日本に伝わっている。

呉昌碩が活躍した上海と、最も緊密なつながりを有していた日本の都市が長崎である。よって、当時の長崎にも、呉昌碩の書画が少なからずもたらされている。

本稿では、呉昌碩書画の長崎における受容について、林源吉（一八八三―一九六三）および彼が開催した呉昌碩展とその図録を起点に論じてみたい。このことにより、日本における呉昌碩受容の一断面を明らかにできるだろう。

### 一、「呉昌碩作画展」と『呉昌碩先生画帖』

一九二〇年七月二四―二六日、長崎県立長崎図書館で、「呉昌碩作画展」が開催された。県立長崎図書館編集『県立長崎図書館50年史』（一九六三、三二、三二・県立長崎図書館）によると、入場者は一三九

呉昌碩書画の長崎における受容について

四人であったという。同年三月六―八日開催の「栗原玉葉女史近作画展」が二六〇五人、五月二九―三一日開催の「山口八九子作画展」が二〇七六人、一月三―二二日開催の「長崎美術展」が三二一四人、一月二七―二八日開催の大阪朝日新聞長崎通信部・長崎市教育会主催「世界自由画展」が一五七八一人、二月二五―二六日開催の「小比賀画伯半折画展」が七五六人であるから、個展としてはさほど多くもないが、少なすぎることもない入場者数といえよう。



『呉昌碩先生画帖』 呉昌碩題字

この展覧会出品物の図録が林源吉編輯兼発行『呉昌碩先生画帖』（一九二〇、一二、三〇・双樹園）である。まずは、その序文「呉昌碩先生画帖発刊に就て」の全文を掲げておく。

本帖は長崎県立長崎図書館に於て大正九年七月下旬開催したる呉昌碩先生作画展覧会出品の一部を撮影記念帖となし之を先生に贈呈此機会を以て同好の人々へ頒ち度く又編者の為め描かれたる近作二件並に先生最近の小像王一亭先生の先生小叙生礦碑文題字五十一種の印譜などを収め先生と親しく面接識見に手腕に随喜渴仰の編者斯界奉仕の一と念じ茲に本帖発刊の実を得たるを光栄とし展覧会の開催より本帖発行に至る甚大の御援助を賜はりし永山時英氏奥田啓市氏白石六三郎氏友永傳次郎氏丹羽末廣氏杉山吉太郎氏大久保玉岷氏始め特志家諸賢の御好意を謹みて感謝す

大正九年十二月二十日 双樹園主人 林源吉

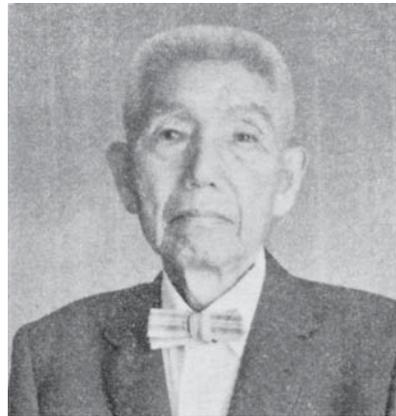
これにより、この展覧会開催と図録刊行は、林源吉が、「特志家諸賢」の助力を得て行ったこと、また、図録贈呈のため、上海に呉昌碩を訪ね、会っていることもわかる。

さらに、林は後年、「長崎美術及び史料展覧会回顧」(『長崎日日新聞』「月曜読物」・一九三〇、一〇、二七・長崎日日新聞社)の中で、私が得意で計画した展覧会に大正九年七月開催の『呉昌碩展』と大正十五年一月開催の『絵像展』がある。呉昌碩展開催に就ては上海の虚明軒友永傳次郎、六三亭白石六三郎両氏の後援に依り遂行し記念として写真帖を調整呉昌碩先生へ寄贈することが出来た。と記し、呉昌碩作画展の「後援」者として、上海在住の友永傳次郎、白石六三郎の両名をあげている。

ちなみに同文に、「出品画五十三点」とあり、「呉昌碩作画展」の出品数がわかる。

## 二、林源吉とは

この林源吉とは、どのような人物なのであろうか。島内八郎 越中哲也編集『双樹園のおもかげ(林源吉氏遺稿・思い出)』(一九六五、六、二五・双樹園友の会)所収「林源吉先生略歴」を見よう(双樹園



林源吉肖像

(中山文孝「亡くなられた林さんを憶う」より)

は林源吉の号で、「林」字が「双」つきの「木」つまり「樹」からなることによる。鍛冶屋町の旧家に生まれ、家業を営んだ後長崎商品陳列所商工主事補、私立長崎博物館主事を歴任するかたわら長崎県文化財専門委員、同公園

審議会委員、長崎県市美術展覧会審査員、史談会幹事として市の郷土史、観光、商工界に大きな貢献をなし、文化財功労者として文部省、長崎県より表彰され、長崎新聞文化章も授けられた。

氏の最も造詣深かったのは古美術で特に陶磁器に対する知識鑑識眼は日本的に知られ専門書『茶わん』の寄稿家であったが、別に若い頃彭城貞徳について絵を学んだので、品格のよい絵も画かれた。

昭和三十八年八月九日長逝、享年八十才

また、生前の林と親交があった中山文孝の「亡くなられた林さんを憶う」(『長崎文化』第十号・一九六三、九、三〇・長崎国際文化協会)には、以下のようにある。

元来林さんのお宅は現在の銀嶺の東角からボンソワールまでの表区劃で裏の溝川までプチ抜いた大きな丸一家具店で、令兄三人の方が朝鮮で貿易商を営んで居られた為に四男坊でありながら家業を継がれたもので、利潤追求よりも、商品の質と意匠の向上に専念された。青貝入り漆器細具の創作は、長崎工芸史に特筆されるべきだと今に思っております。(中略)

大正六年林さんは家業を廢められて商品陳列所(現在日本銀行支店在地)に入られ、一般工芸品の意匠製作指導、鑑定に当られ、

傍古典・伝統の研究に没頭されましたため此面蘊蓄は大したもので、また陶器の研究も此頃から特に深められ過般物故された富本憲吉氏との交流も繁かった様に聞き及んでおりました。

昭和十四年林さんは博物館に入られ、郷土史研究に邁進される事になられました。その結実を常に新聞、雑誌に発表されました。其頃から郷土玩具、寺社建築、仏教芸術等、文献に、実地踏査に研究を進められ、其足跡は鎌倉、京都、奈良、遠くは朝鮮、満支にも伸ばされました。環境と健康に恵まれたこうした御仕合せを実に羨ましく思われました。

この二つの略歴から、美術工芸に造詣の深い大店の主人が、趣味を本業とし、郷土史研究家に転じた生涯が窺える。

### 三、文化的活動へ

林は、「呉昌碩作画展」を開催し、『呉昌碩先生画帖』を刊行した一九二〇（大正九）年には、すでに家業をやめ、商品陳列所に入っていた。商品陳列所は、「国内外の生産品を蒐集して、公衆の縦覧に供するとともに当該業者の参考に資する目的をもって、明治二九（一八九六）諏訪公園入口に設立された」施設であり、大店の主人であった林は、ここに入ったことで、「当該業者」の取りまとめをする立場になったと思われる。

そして林は、この転職を機に、鍛冶屋町から馬町に転居している。『呉昌碩先生画帖』の奥付に、「編輯兼発行者 長崎市馬町 林源吉／発行所 長崎市馬町二〇 双樹園」とある地点である。当時の地図を見ると、商品陳列所に極めて近く、すぐ北にある諏訪公園に入ると、「呉昌碩作画展」の会場となった長崎県立長崎図書館も近い。

諏訪公園は、「明治六年の太政官布達により明治七年に設置された長崎県下最古の公園」で、鎮西大社諏訪神社に隣接し、長崎奉行所立山役所の跡地という由緒ある土地である。現在も、長崎県立長崎図書館

呉昌碩書画の長崎における受容について

館、長崎歴史文化博物館があり、商品陳列所の跡地には日本銀行長崎支店がある。

林は、この由緒ある土地に勤務し、その近くに居住して、文化的活動を行っていくことになる。その一つが「呉昌碩作画展」の開催と『呉昌碩先生画帖』の刊行であった。

### 四、「特志家諸賢」

この「呉昌碩作画展」開催と『呉昌碩先生画帖』刊行は、林ならではの方法で行われた。つまり、「当該業者」の取りまとめをする立場と、大店の主人時代の人脈も活かし、「特志家諸賢」の協力を得て行ったのである。

前出『呉昌碩先生画帖』序文「呉昌碩先生画帖発刊に就て」に見える、この「特志家諸賢」について紹介しておこう。

永山時英（一八六七—一九三五）は、鹿児島の人。第七高等学校造士館教授を経て、一九一五年、長崎県立長崎図書館初代館長に就任し、二十一年間在職した。古賀二郎・武藤長蔵と共に、長崎学の三羽鳥と称され、古賀が創設した長崎史談会（第一期）の顧問として機関誌『長崎談叢』に多く寄稿している。長崎史談会は、一九二八年、林らが発起人となって、再興されることになる（第二期）。林がこころまじく永山の名をあげているのは、「呉昌碩作画展」の会場となった図書館の館長としてのみならず、自らも志す郷土史研究の先達として敬意を表しているからであろう。

奥田啓市（一八八三—？）は、福岡の人。東京市立日比谷図書館司書から一九一五年、長崎県立長崎図書館司書に転じ、一九二一年から一九四四年まで鹿児島県立図書館長をつとめた。大谷利彦『長崎南蛮余情 永見徳太郎の生涯』（一九八八・長崎文献社）が引く、一九五三年三月一日付『毎日新聞』島内八郎「長崎での茂吉」に、「（斎藤）茂吉氏は県立図書館の司書の前記奥田氏を中心とする文化人の一団、永

見徳太郎、水谷安嗣、大庭耀、谷田定男、林源吉氏等諸氏とわい談会的なものをこしらえていたらしく当時美人で有名な四海楼陳玉姫さんも引入たようだ」とあり、林と個人的にも親しかったことがわかる。

白石六三郎（一八六六—一九三四）は、長崎の人。鹿叟と号した。

上海随一の日本料亭・六三園の主人で、呉昌碩を庇護し、一九一四年九月には、六三園で呉昌碩の個展を開催している。長崎随一の卓袱料亭・富貴楼二代目・内田栄四郎の三男・耀一郎を養子に迎えていた。

拙稿「呉昌碩と白石六三郎」（拙著『呉昌碩研究』、二〇〇九、二、二七・研文出版 所収）を参照されし。

友永傳次郎（生卒年未詳）は、長崎の人。霞峰と号した。上海に古玩書画店・虚明軒を開き、呉昌碩らの書画を日本に仲介した。六三園での呉昌碩個展にあたっては、呉昌碩の案内役を買って出ている。拙稿「日本における呉昌碩の受容——大正・昭和編（一）」、「友永霞峰」（中国近現代文化研究会編『中国近現代文化研究』第一〇号・二〇〇九、三、三一・中国近現代文化研究会 所収）を参照されし。

丹羽末廣（一八五九—一九三八）は、熊本の人。翰山と号した。長崎の『東洋日の出新聞』主幹として活躍、辛亥革命にあたって孫文を支援した。島内八郎「林さんの思い出」（長崎史談会編集『長崎談叢』第四十一輯・一九六三、一二、二五・藤木博英社 所収）に、丹羽と林のおもしろい逸話が記されている。「もう三十年も昔になるが、或る夕刻林氏が図書館に勤めていたわたしのところに困り切った顔付で来て相談があるという。聞くと林さんが商品陳列所（現日銀の場所）で丹羽翰山氏など四、五人と雑談をしているうち丹羽氏がいなくなつたので林氏が丹羽氏の悪口を言い出した。悪口といつてもたいしたものではなく軽い批難めいたものだったらしい。ところが丹羽氏はいなくなつたのでなく、椅子にからだを倒していたため机にかくれて見えなかつたのだ。それが『アー』と欠伸をして身を起こしたので林氏は大狼敗、わたしのところに飛んで来たという訳で、いつたいどうしたらいいでしょうか、と相談された。わたしは『これは卒直に詫びたが

いいですよ、丹羽先生も人物が枯れておられるから根に持たれることはありませんまい」と励ましたので、そうしましょうと、さすがに悄然と出て行かれた。あとで聞くと菓子折持参で詫びにゆかれ、丹羽氏も笑つて水に流されたそうだが、あの時の林さんの困り切った微妙な表情は実に可笑しかった。二人の関係がとてよくわかる逸話である。

杉山吉太郎（一八五九—一九二五）は、長崎の人。楊甫と号した。

長崎有数の料亭・迎陽亭（こうようてい）第三代主人。長崎県料理業組合本部長をつとめ、斯界の発展につくした。また、迎陽亭を、書画等の売り立て会場に提供するなど、長崎の文化界を下支えし、知友であつた白石六三郎を通して、呉昌碩の書画を収蔵した。歿後編まれた丹羽末廣編輯『杉楊甫』（一九二六、三、二一・横田萬次郎〔非売品〕に略伝・逸事・回憶・弔辞などが収められている。

大久保玉岷（一八七四—一九四九）は、長崎の人。本名は栗蔵。日本画家。青年期、上京して川端玉章に師事し、近代日本画を学んだ。長崎に帰ってからは、後進の指導にあたり、栗原玉葉らの弟子を育てた。一九〇二年、丹羽末廣らと共に『東洋日の出新聞』創刊に参加している。林の談話を記録した越中哲也「林先生書き抄」（前出『長崎談叢』第四十一輯所収）に、「私の家は屋号を丸一という家具屋でしたが今と違つて漆器や青貝等も注文に応じて自作していたので其等の職人が店にいました。大久保玉岷も一時青貝細工の下絵を私どもの店で画いていた事があります」とあり、林と極めて親しかったことがわかる。

つまり、永山と奥田は展覧会の会場を提供し、白石と友永は呉昌碩との仲介をし、丹羽と杉山と大久保は長崎の文化界・実業界・美術界の後援をとりつけたのであろう。こういった「特志家」の協力があつて、はじめて林は「呉昌碩作画展」開催と『呉昌碩先生画帖』刊行を成し得たのである。

## 五、呉昌碩画の収蔵者

『呉昌碩先生画帖』目次には、作品名・制作年・画幅寸法などと共に、収蔵者名が記されている。

- 横田萬次郎蔵 「芍薬（六十歳頃作）」  
白石六三郎蔵 「観音像（七十歳作）」「燕子群飛（七十一歳作）」  
「瀑泉（七十一歳作）」「松朝陽（七十二歳作）」「竹林（七十一歳作）」「夏景山水（七十一歳作）」「雪景山水（七十二歳作）」「牡丹（七十二歳作）」「籃蟠桃（七十二歳作）」「水仙（七十二歳作）」  
杉山吉太郎蔵 「水仙（七十歳作）」「葫蘆（七十三歳作）」  
坪井熊治蔵 「松（七十二歳作）」  
安田伊太郎蔵 「太湖石（七十歳作）」  
本多伊久男蔵 「竹（七十二歳作）」  
山口經夫蔵 「竹（七十五歳作）」  
鶴田雄三蔵 「月兔（七十一歳作）」  
馬場卓一蔵 「山水（七十二歳作）」「桃花燕子（七十二歳作）」  
河村景敏蔵 「菊（七十二歳作）」  
大久保玉岷蔵 「蘭（七十五歳作）」  
西河八八蔵 「竹（七十五歳作）」  
荒木真蔵 「梅（七十六歳作）」  
山野邊幸家蔵 「水仙（七十五歳作）」  
浅野平二蔵 「梅（七十六歳作）」  
萩井陸三郎蔵 「仙桃（七十六歳作）」  
池島正造蔵 「雪景山水（七十六歳作）」  
林源吉蔵 「梅（七十七歳作）」「竹（七十七歳作）」
- 以下、既出以外の人々について紹介する。
- 横田萬次郎は、長崎市新町在住の骨董商。前出丹羽末廣編輯『杉楊

甫』の発行人となっている。一九三一（昭和六）年四月二一日消印池島正造（後出）発植木元太郎（島原鉄道創立者）宛葉書（長崎県立長崎図書館蔵）に、「今般横田萬次郎氏の所蔵品千六百余点売却の依頼を受け候に付左記の時日入札並に売立仕候間御来場被成下度此段御案内申上候」（印刷）とあり、この時まで死にしていたこと、およびその人脈が窺える。

坪井熊治 未詳。

安田伊太郎は、上長崎村出身の実業家。桜の名所である新中川町で、温泉付料亭・カルルス皆花園を経営した。カルルスの名は、チェコ西部カルルスバートの鉱泉を結晶させた調剤を投薬したことに由来する。

本多伊久男は、長崎の酒屋で、友永傳次郎の友人であると、坂東貫山述 佐分雄二記「貫山夜話」「十五 呉昌碩」（『日本美術工芸』通巻第二三〇号・一九五七、一一・日本美術工芸社 所収）にある。

山口經夫は、北高来郡本野村在住の実業家。諫早銀行取締役、島原鉄道株式会社監査役、長崎県議會議員などをつとめた。

鶴田雄三 未詳。

馬場卓一は、長崎市桜町在住の実業家。長崎電気瓦斯株式会社取締役、松島炭鉱株式会社監査役などをつとめた。

河村景敏 未詳。

西河八八 未詳。

荒木真は、長崎市酒屋町在住の表具製造業。

山野邊幸家 未詳。

浅野平二 未詳。

萩井陸三郎は、長崎の人。晴霞と号した。煎茶文雅流家元。「仙桃（七十六歳作）」に、「晴霞先生六十一歳大寿、己未三月、呉昌碩年七十有六、時客滬壘」とあり、「己未（一九一九）三月」に六十一歳の誕生日を迎えていることがわかる。

池島正造は、長崎市麴屋町の骨董商・池正の三代目。富井信行著作兼発行『長崎県人物事業大鑑』（一九三一、七、五・東京商業興信所

長崎支所)に顔写真入りで紹介されており、この時点で「六十二才」とある。

これらの所蔵者たちは、林および「特志家諸賢」の呼びかけに応じ、自蔵の呉昌碩画を、「呉昌碩作画展」と『呉昌碩先生画帖』のために提供したのである。『呉昌碩先生画帖』には三十一点が収められているが、前述の通り、「呉昌碩作画展」の出品数は五十三点であるから、もっと多くの所蔵者の協力を得ている可能性もある。

## 六、長崎業界・文化界人脈

このように林は、長崎各界の人脈を総動員して、呉昌碩の展覧会開催と図録刊行を行っており、林自身も、「私が得意で計画した」と言っている。ただ、所蔵者の中には、以前から呉昌碩画を好み、七十歳作を蔵している者もいる中(横田萬次郎蔵「芍薬(六十歳頃作)」は、旧作を購入したと思われる)、林は、七十七歳作つまり「編者の為め描かれたる近作二件」しか蔵しておらず、もともと呉昌碩に興味があったとは思えない(林は『長崎談叢』等に多くの文章を残しているが、本稿に紹介したもの以外は呉昌碩に触れたものがない)。つまり、林は、自身の興味に基づいて呉昌碩の展覧会開催と図録刊行を行ったのではなく、自らの人脈の中から出て来た要望を汲み取り、そのまとめ役として、最大努力をこの事業に傾注したのである。林が、この人脈のまとめ役という地位をいかに大切にしていたかがよく窺える。では、呉昌碩の展覧会開催を求めたのは、誰なのであるか。おそらくは、呉昌碩の庇護者かつ理解者であり、上海の六三園で呉昌碩の個展を開いている白石六三郎が求め、その知人である杉山吉太郎がこの人脈に働きかけたのであろう。

丹羽末廣「楊甫翁逸事」(前出丹羽末廣編輯『杉楊甫』所収)に、以下のような記述がある。

上海。白石六三郎氏之。於楊甫翁也。莫逆。依依。多年于茲矣。

大正十三年一月。新葺茶寮。乃依呉昌碩察名楊甫庵。且楣其偉題云。一日居家。倏然昏倒矣。恍惚之中。分明。目睹楊甫翁平日之顔容。言欲出。而不得。忽為家人連喚之聲所驚覺。微開睫。既有医坐席焉。須臾。電報自長崎達。即楊甫翁訃音也。一読一叫。反側。遂成疴。藥餌閱週而。後漸痊

(上海の白石六三郎氏は、楊甫翁(杉山吉太郎)と長年心を通わせ、慕っていた。大正十三(一九二四)年一月、新たに茶寮を築き、呉昌碩に依頼して寮に楊甫庵と名づけ、かつそのみごとな題額を掲げたという。ある日家にいて、突然目がくらんで倒れ、ぼんやりした中で、はっきりし、楊甫翁のいつもの顔かたちが見えた。話そうとしたが、できなかった。たちまち家人の連呼する声が出て驚いて目覚め、わずかにまつげを開くと、すでに医者が坐っていた。しばらくして、電報が長崎から届き、それが楊甫翁の訃報であった。読みながら叫び、ころびまわった。かくして病氣となり、療養すること一週間、後ようやくなおったのである。)

これより、呉昌碩と白石の親しい関係、そして、白石の杉山へのただならぬ敬慕の念がよく窺える。

また、同文には、

楊甫翁。平日。鍾愛上海六三園所什呉昌碩詩画羣燕図

「楊甫翁は、いつも、上海六三園が蔵していた呉昌碩詩画羣燕図をとても愛していた。」

とある。つまり、杉山は、白石の蔵品であった「呉昌碩詩画羣燕図」を譲り受け、愛玩しているのだ。この「呉昌碩詩画羣燕図」は、「呉昌碩作画展」に出品され、『呉昌碩先生画帖』に収められている白石蔵「燕子群飛(七十一歳作)」の可能性がある。

『杉楊甫』には、さらに白石六三郎「赤壁茶戦」という文章が収められている。その冒頭に、

私は幼少時代から杉山楊甫翁から識られて殊更に翁の人格に景慕措かざる事が少なく無いのでした而して私は現今の職業を営むこ

ととなりましては猶ほ一層其の指導を冀ひつゝありたのです

とあり、そして、大正十一年（一九二二）壬戌秋七月既望、たまたま上海から長崎市銀屋町の旧宅に帰省中の白石は、宋の蘇東坡赤壁舟遊にちなんで、团平船を仕立て、杉山を首賓に、その同流八、九人を招き、酒興の後、竹皮包みのおむすびを配した。翌日、杉山から茶席に誘われた白石は、昨夜の没風流を一喝されるのかと思いきや、茶席の正床に、昨夜のおむすびを包んだ竹皮が表装されて掛けられており、献立および茶席の趣向はことごとく赤壁の故事にちなんだものであったという。もっとも、白石は、この竹皮の裏面に、大久保玉岷の画および春慶漆を加えていたのであるが、これは弁当器具共進の故事の焼き直しに過ぎず、杉山の趣向は赤壁の逆襲のようであったとしている。この内容から、白石と杉山の親しさと厳しさが入り交じる関係と、中国の文人的教養を重んじる姿勢が窺える。

上海で呉昌碩の個展を行った白石は、故郷の長崎でも、是非とも開催したかったはずであり、その思いを、まず杉山に伝えたとはいえない。そして、杉山は、それを商品陳列所にいた林に伝え、林は、それまでほとんど知らなかった呉昌碩の展覧会と図録刊行を、一手に引き受けたい——ということではなかったかと筆者は推測する。

当時、林は、家具商から業界の取りまとめ役に転身したばかりである。自らの人脈を駆使すべき立場となった林は、ほぼはじめての大仕事として、この展覧会と図録刊行をとりしきった。このことにより、林の人脈は、より確固としたものとなったはずで、後の博物館入りと郷土史研究者への転身につながっていったと思われる。

林の名前が編輯者となっている唯一の単行本が『長崎案内』（一九三三、七、一〇・長崎観光客誘致研究会）である。これは長崎の観光ガイドで、末尾には広告頁が二二頁付いている。もとよりすべてではないであろうが、これらの中には、林の業界人脈が多く含まれているはずで、カルルス皆花園、富貴楼などの広告も見える。そして、迎陽亭の広告は、林の手になる図案（明記はされていないが、図案にすぐ

呉昌碩書画の長崎における受容について



林源吉図案（推定）迎陽亭広告

れた林の他の作品スタイルから明らかである）が採用されている。

## 七、呉昌碩「竹」の胸中

林が蔵していた「編者のため描かれたる近作二件」のうち、「竹（七十七歳作）」は、林が勤務していた長崎市立博物館に収められ、現在、その後身である長崎歴史文化博物館に蔵されている。もう一件の「梅（七十七歳作）」には為書がないが、こちらにはあるため、林は、手許に残したのではないか。長崎市立博物館には、林の同僚で、後に館長となった越中哲也氏（一九二一—）が、林の歿後に入れたという。呉昌碩が、為書入りで林のために画いた唯一の作品である。款書を翻字し、訳出しておこう。

磨墨一升許、画出数竿竹。

日莫西風来、如聞夏寒玉。

双樹園主人正之。吳昌碩、年七十七、時庚申秋。

〔墨を一升ばかり磨り、数竿の竹を画き出す。〕

日が暮れて西風が吹いて来ると、寒玉のあたる音が聞えるかのようだ。

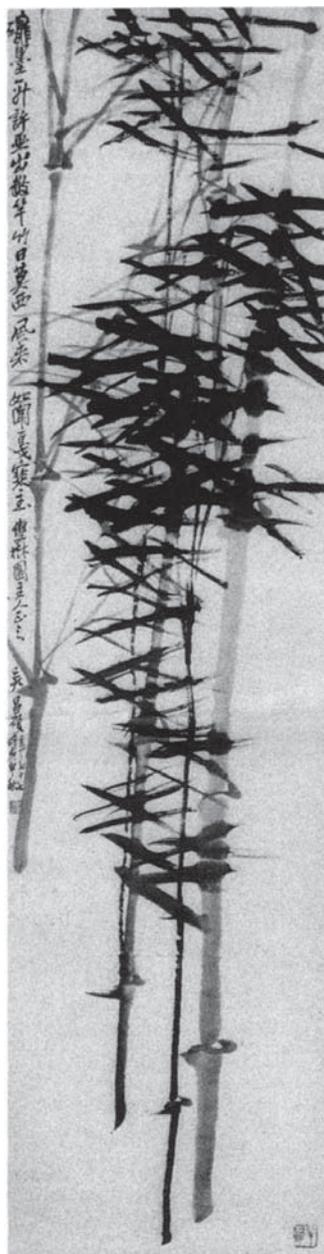
双樹園主人（林源吉の号）これを正されたし。吳昌碩、年は七十七、時に庚申（一九二〇）の秋。〕

たっぷり磨った墨で画かれた竹は、吳昌碩の分身である。秋のわびしい西風が吹きつけると、竹は互いにあたって音をたてる。寒玉は緑玉ともいい、竹の異名である。この美しい玉のような竹は、静謐ではあるが寂寞の音を発しているのである。

吳昌碩は、この自身を投影した竹の画を林に与え、自らの展覽会を開いてくれた長崎人士に心を通わせた。

おわりに

林源吉が長崎で開催した「吳昌碩作画展」は、日本でははじめての本格的な吳昌碩個展と言っていいだろう。また、その図録である『吳昌碩先生画帖』も、これより前に刊行されたものは、田中慶太郎編



吳昌碩与林源吉  
「竹（七十七歳作）」  
(長崎歴史文化博物館蔵)

『昌碩画存』（一九二二、一二、一五・田中慶太郎）、谷上隆介編『吳倉碩画賸』（一九二七、九、二〇・飯田呉服店美術部）、田口米舩編『缶廬臨石鼓文全文』（一九一九、八、一〇・田口米舩）、田中慶太郎編『吳昌碩画譜』（一九二〇、五、五・文求堂書店）しかなく、『吳倉碩画賸』が即売会のための小冊子、『缶廬臨石鼓文全文』が書の一品のみの影印であることを鑑みると、その意義は極めて大きい。

林は、『昌碩画存』『吳昌碩画譜』を刊行した文求堂書店主人・田中慶太郎（一八八〇—一九五一）のように、吳昌碩書画の愛好者でもなければ、収蔵者でもなかったが、この事業を引き受けた。それは、かけがえない長崎人脈のため——というのが本稿の結論である。

ただ、林は、この事業を主催するにあたり、自身の収蔵のため、吳昌碩に二件の画を依頼し（吳昌碩が林に贈った可能性もあるが）、図録のため、王一亭に小叙を書いてもらい、吳昌碩の小像写真と題字および生壙志拓本を取り寄せている。また、図録に掲載された作品も、白石六三郎蔵の十件、杉山吉太郎蔵の二件など精品が多く、林の高い企画力と鑑識眼が窺える。

その林の高い企画力と鑑識眼により、「吳昌碩作画展」と『吳昌碩先生画帖』は、高い水準を有することになった。その原動力が長崎人脈にあったことは、日本における吳昌碩受容史において特筆されねば

ならないだろう。

注

- (1) たとえば、岡林隆俊編著『上海航路の時代——大正・昭和初期の長崎と上海』(二〇〇六、一〇、一・長崎文献社)は、「大正一二年(一九二二)二月一日、長崎・上海間に上海航路が開設され、長崎丸が就航し、続いて、三月二五日には姉妹船の上海丸が就航しました。速力二一ノットの高速船の就航により長崎と上海は二六時間で結ばれ、長崎市民にとって上海は東京より近い都市になりました。(中略)一方、この頃の上海では、沢山の日本人が黄浦江の支流の蘇州河左岸側の虹口地区に住み、この地域が日本人街になっていました。上海の居留民二万人の九割がこの虹口地区に居住しており、中でも長崎県出身者が圧倒的に多く、虹口は長崎の町の一画を移転したようであったと言われています」という。
- (2) 大谷利彦『長崎南蛮余情——永見徳太郎の生涯』(一九八八、七、一五・長崎文献社)は、「昭和五年十月十七日から五回にわたり、『長崎日日新聞』に林源吉の「長崎美術及び史料展覧会回顧」が連載された」と記すが、実際には、同年十月二十七日の「月曜読物」に全文が掲載されており、連載ではない。
- (3) 長崎大学附属図書館編集『幻影長崎 レンズに写った時代と街 長崎大学附属図書館古写真展』(一九九五、五・長崎大学附属図書館)
- (4) 津田礼子「長崎公園(諏訪公園)の歴史と景観」(『活水論文集 健康生活学部・生活学科編』第四八集、二〇〇五、三、三一・活水女子大学)同文は、「明治期に日本で初めて公園が設置されたが、明治六年の太政官布達によるものが、日本における公園制度の濫觴であった。先ず、この布達により、東京の五公園(上野、芝、浅草、深川、飛鳥山)の他、地方に一六ヶ所の公園が設置され、諏訪公園はその内の一つ、即ち日本でも最古の公園の一つである」と続く。

呉昌碩書画の長崎における受容について

〔付記〕

本稿執筆にあたり、研究調査に寄せていただいた長崎県立長崎図書館、長崎歴史文化博物館、そして、長崎歴史文化協会の越中哲也氏、長崎市の大音寺より格別のご助力、ご教示をいただいた。ここに記してお礼申し上げます。

本稿は、平成二三年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「呉昌碩と日本人士」(研究代表者 松村茂樹 課題番号 23520180)による研究成果の一部である。